



【目的】 AphasiaBank 日本語データの手続き説明課題の談話について、Main Concept Analysis (MCA) の観点からみた特徴を探る

AphasiaBank (<https://aphasia.talkbank.org>) MacWhinney ら (2011) による、ネットワーク上で共有できる国際的な失語症の発話コーパス

失語症のある人・対照群の発話データ (トランスクリプト・ビデオ) …基本情報 (年齢・きき手等)、失語・認知機能検査結果等 12 言語以上・数百名のデータあり
課題は各言語共通 個人データはパスワード保護、登録された研究者・臨床家のみアクセス可 実施マニュアルや資料は分析システムとともに HP から DL 可

Main Concept Analysis (MCA) Nicholas, Brookshire (1993) が提唱

適切な談話に不可欠な要素 (メインコンセプト(MC)) の、情報伝達量 (内容)・正確性 (形式) を評価 注:英語では MC は文 (主語と動詞があり、格構造がある)
失語の重症度・対面呼称・聞き手の理解割合・会話能力・コミュニケーションに対する自信・社会参加 等と相関あり (英語)

【方法】 AphasiaBank日本語データ (飯塚, 関根 (2023) および独自データ) 「梅干し入りのおにぎりの作り方を教えてください」と尋ね、説明してもらう

研究協力者 失語症のある人 9 名 (男:女=8:1) 平均 69.3±7.1 (範囲 57.4-82.2) 歳 きき手 (右:左) 8:1 発症後平均 10.5±6.9 (範囲 0.3-23.3) 年 (日本語話者)

失語症タイプ…Broca 失語 5 Wernicke 失語 2 伝導失語 1 全失語 1 重症度…重度 2 中等度 3 軽度 4

検査 WAB 失語症検査 (I. 自発話 II. 話し言葉の理解 III. 復唱 IV. 呼称) …平均 AQ76.7±25.2 (13.8-92.4)

SLTA 呼称…平均 17.0±4.1 (10.0-20.0) レーヴン色彩マトリシス検査…平均 29.0±3.0 (22.0-35.0)

対照群 (脳損傷の既往のない人) 3 名 (男:女=2:1) 平均 63.5 歳 全員右きき

【結果】 各群の平均表出項目数:失語群 5.38±1.58 (範囲 3-8) 対照群 7.7±2.62 (範囲 4-10)

→失語の有無により、項目数の有意差なし ($U=6.0, p>.01$)

両群とも 8 割以上が言及; ①ご飯を広げる ②梅干しを入れる ③握る **高頻度項目**

高頻度項目の出現率はその他の項目よりも有意に高い ($U=0.0, p<.01$)

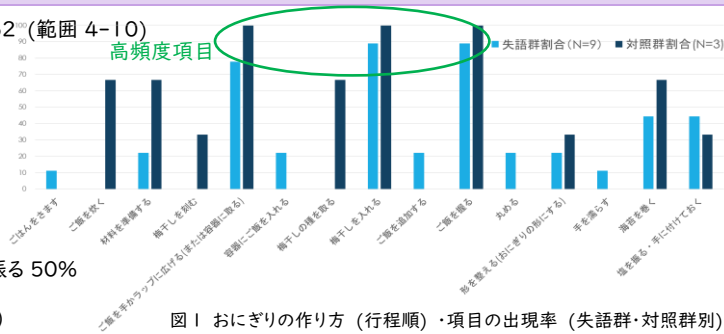
失語群の結果 (言語表出のなかった 1 名は除外)

回答項目…①梅干しを入れる・握る 100% ③ご飯を広げる 88% ④海苔を巻く・塩を振る 50%

(“ご飯を炊く・梅干しの種を取る”は対照群の 6 割に出現しているが、失語群にはなし)

複数の解釈が可能な項目多数 (“梅干しを握り込む”→梅干しを入れる&握る?) *錯語や不自然な表現は意図したかと思われる項目に分類している

対照群の結果 回答項目…①ご飯を取る・梅干しを入れる・握る 100% ④ご飯を炊く・材料準備・梅干しの種を取る・海苔を巻く 67%



【考察】 おにぎりの作り方の MC (失語群&対照群) →①ご飯を広げる ②梅干しを入れる ③握る

失語群も対照群と共通性のある MC を活用し、ある程度の言語表出ができる人は不完全ながら談話を行っていた

*ただし細部 (準備や細かい手順) においては差が大きい

説明に含まれる要素数は失語群と対照群で有意差なし→不完全発話を多用する代償的戦略という側面も評価できる?…データ数を増やして検討したい

会話における形式面 (完全性・正確性) の評価

日本語 (特に話し言葉) …様々な理由が働き、他言語よりも文脈依存が強い→文の各部に不完全な表現が出現しやすい

例:文脈から明らかな情報は効率化したいから、主語・目的語の省略が起こる/相手に解釈をゆだねたい (察してほしい) から、述部が不完全となる (言いざし等)

→日本語の場合、画一的な基準に基づいた評価ではなく、聞き手の知識や前後関係・発言意図などを反映した、幅のある形式面の評価方法を確立する必要あり?

日本語の MCA に関する先行研究

櫻岡, 藤田 (2024) 情景画説明課題

※正確=細部に誤りがあっても談話の中で命題の正しい意味が伝わる 完全=命題を構成する述語または項が欠けていない

主要命題の発話数 および 正確かつ完全な発話数…失語症群<健常群

不正確な発話数 および 不完全な発話数…失語症群>健常群

→本研究と共通の傾向はあるが、正答率に差がある

本研究では失語群&対照群とも不自然・断片的な表現が多く、「情報伝達量」と並ぶ MCA の要諦である「形式面 (完全性・正確性)」は失語の有無によらず怪しい

*先行研究とは課題の種類・話者の構えの違いあり 本研究…聞き手を意識しつつも比較的格式ばらない会話場面&非現前の手続き説明課題⇒文脈依存性↑?

【まとめ】 失語症のある人 (最重度の方を除き) ⇒不完全ながらも対照群と同傾向のメインコンセプトを備えた談話を表出

日本語学・失語学に関する知見を踏まえ、他言語との比較に耐える妥当性・客観性を備えた MCA の評価の枠組み (特に形式面) を定義することが必要

→AphasiaBank の言語データ&分析システムのさらなる活用も

【文献】 MacWhinney, B., Fromm, D., Forbes, M., et al. (2011). AphasiaBank: Methods for studying discourse. Aphasiology, 25, 1286-1307.

Nicholas, L. E., Brookshire, R. H. (1993). A system for quantifying the informativeness and efficiency of the connected speech of adults with aphasia. Journal of Speech, Language, and Hearing Research, 36, 338-350.

櫻岡絵里香, 藤田郁代. (2024). 失語症者の状況説明における意味の伝達—命題表現からの検討—. 言語聴覚研究, 21 (3), 226-235.

飯塚直子, 関根和生. (2023). AphasiaBank 日本版の構築に向けて. 第 49 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会予稿集, 114.